ヴィーナス通信

Venous(静脈) Venus(護美の女神)

第7号

発　行　東多摩再資源化事業協同組合
理事長　紺野武郎　編集長　吉浦髙志
東京都東村山市久米川町1-16-5
TEL & FAX　0423-95-9788

小さな行動で大きな変化を！

理事長　紺　野　武　郎

新年のお慶びを申し上げます。昨年の古紙余剰化騒動は、二十一世紀のメタボリズム（物質代謝）文明構築に、色々な教訓と課題を与えてくれた。後始末をするプロセスを無視して生産消費する社会構造が、従来からのリサイクルシステムを駆逐し、待った無しに清掃行政に肩代わりさせようとした結果、税金が倍々ゲームで必要になることを全国の自治体が証明した。

そして必死にごみ減量をすればするほど上流から物が流れ、資源化するほど市場価値を失う虚しさを思い知らされた。

まさに製造者責務を課さない「外部不経済の理論」そのもので、発生抑制効果など望むべくもない社会と言える。

ただ資源として分別排出するだけでは解決しない。何か具体的な行動を起こさなければ前進しない。

身の回りの無駄を一つ一つ自分で排除する方法を実行する時かもしれない。

紙類に限ってみても、家庭内には新聞・チラシ・本類・雑誌・ダイレクトメール・郵便物・包装紙・紙箱・衛生紙等一世帯当り一ケ月一五～二〇キログラムにも達している。

新聞の折込みチラシは断わることができるし、ダイレクトメールも受取り拒否できる。

これらの紙は紙面に色々な物質を塗布したコート紙が殆どで、再生の際も問題が多い。

全国紙各紙に一ページ大の広告を出す企業にも紙の無駄遣いを考えろと抗議電話したい。

新聞社自信にも、古紙たれ流しを戒めなければならない。

過剰包装も改善されていないだけでなく、金銀紙やビニールコート紙等の難リサイクル紙も多く使われていて、これらは消費者が販売者に返すか改善を要求する必要がある。

トイレットペーパーの再生紙使用はもちろんだが、紙幅は欧州並の十センチ（JIS規格十一センチ）で十分だ。一センチで年間十万トンの紙が節約できる。

NTTの電話帳だけでも二年発行にしてもらえば毎年八万トンの紙節約になるのだ。

まだまだ紙そして紙以外の家庭用品でも色々な工夫が考えられるが、目の前のちょっとした疑問が、リサイクルの悪循環をただすことになる。

小さな勇気と行動が、ただ資源節約するだけでなく、生産・流通・後始末に使われる莫大なエネルギーや物資の節減につながり、「地球の熱冷まし」にも大いに役立ってゆくのだとの意識が大切だと思う。

今年も本通信を通じて業界メッセージを送ります。ご指導の程宜しくお願い致します。

直言拝聴

「創造的リサイクル事業への転換」

リサイクル経済研究所代表
金蘭短期大学教授　吉村哲彦

1、リサイクル市場の変革

（1）リサイクル事業への新規参入

わが国には昔から静脈産業が社会に根をおろしていた。瓶、ぼろ、古紙、鉄屑などの回収が零細、中小企業によって営まれてきた。だが最近、大手企業が参入しはじめたのである。ヤマト運輸は、「静脈物流を新規事業の柱にする」と昨年6月に表明した。「宅急便」の取扱個数が96年度に7億個超えたが、今後2－3％程しか増加が見込めない。その打開策として「廃棄物輸送に取り組めば10－15％の成長が可能だ」と見込み、自治体のごみ回収から廃家電の回収まれ対象品を広げている。

日本通運もオフィスから使用済みパソコンを回収・輸送する事業をはじめた。また、今年度より廃家電の回収をはじめることを企画している。

日本貨物鉄道は、輸送量の減少を廃棄物の輸送で活路を切り開こうとしており、「環境にやさしい鉄道貨物」というビデオで自治体や企業に売り込み中である。このように、大手輸送会社に廃棄物への参入のきっかけの一つが、通産省が今年度の成立を目指している「家電リサイクル法」（仮称）である。廃家電の全体の4分の3を占め、年間千六百万台のテレビ、冷蔵庫、エアコン、洗濯機の4品目を対象に、メーカーが販売店を通じて回収・処理するシステムをつくるための法律である。

（2）37兆円の成長産業

「環境（リサイクル、廃棄物処理）の市場は、現在の15兆円から二〇一〇年には37兆円に拡大し、雇用数は64万人から一三八万人に増加する」と成長分野のベスト5に挙げている。（産構審小委の報告書における試算）。当然、このことは廃棄物の総量が年間4億5千万トンを超え、燃やせばダイオキシン汚染問題、埋立地もないという深刻な社会問題と係わってくるのである。このまま放置すれば環境が破壊されるばかりでなく経済活動も脅かされる状況にある。廃棄物を減らし、リサイクルへと誘導するには法的規制の強化とともに市場メカニズムをいかに上手に活用していくのかが鍵となてくる。

実際、国際的にみても、海外との安定的取引に欠かせないのが、企業のISO14000の取得であり、海洋汚染の防止を目的とする廃棄物の海洋投棄禁止のロンドン条約、有害廃棄物の国境を超える移動の規制に関するバーゼル条約の施行、国内では、「容器包装リサイクル法」、埋立処理の安定型かた管理型への移行とごみ問題からの法規制は厳しさを増すばかりである。

2、再生資源回収業の生き残り戦略

（1）遅れている戦略的リサイクル

再生資源業界としては、〝追い風〟ともいえる状況下にある。このような一連の法律施行の目的は、ごみをいかに減らすか、環境にどれほどの配慮をするかを企業に求めたもので、今後の企業の競争力を左右するものになるだろう。ところが、これらの法律の成立に対しても、再生資源業界は積極的な対応をするのではなく、「受身的」にしかとらえていないところに「戦略的」思考が欠けているのである。

市民レベルでの環境問題への関心の高まり、企業の「ごみゼロエミッション」推進、行政レベルでの「ごみ減量」とか「リサイクル推進」という動向はリサイクル事業としての大きなビジネスチャンスなのである。この新たな環境変化に対して、当業界としてどのようにかかわり、いかに参画していくのかの合意がいまだにできていないところに問題がある。

当業界にとって緊急課題はリサイクルを進めていくうえで市民、企業、行政が専門業者として業界に「期待している役割」と、当業界が「いままでの仕事の延長」としてやろうとしていることとのギャップがあまりにも大きいということである。

（2）払拭できない「相場中心の商売」

当業界の産業形態は、一般的にみて、労働集約型というイメージが強い。通称「寄せ場」とか「バタ屋」といわれ、かつて戦後の物資不足の時代の古物扱い業者の延長上にあるのが実態である。それゆえ個別企業の経営は零細、中小企業が多く、後継者不足に悩み、魅力的事業とはいえない。このイメージを払拭し、「地域に貢献」するリサイクル事業に転換していくには、古紙とか、鉄屑とかガラスとか非鉄などの取扱物資別での「業種」での「市況中心の商売」から脱却しなければならない。

当業界での経営の実状は、毎日の「集荷、処理、販売」という業務に追われ、そして大きな関心は古紙、鉄屑などの「相場」にあり、「地域社会への貢献」という経営行動にまで領域が及ばなかったのが実状である。

3、創造的リサイクル事業

（1）「プロ」としての再生資源回収業者

リサイクル事業の「プロ」として自治体の「分別収集」に、どのような協力体制がとれるのかが問われているのである。

すなわち、市民レベルでの「環境問題」や「リサイクル運動」の高まりに対し、専門的立場から市民や行政とともにいかにリサイクルに取り組むのか、そのための「助言」や「ノウハウ」をどれだけ提供できるのかである。

当然のこととして、リサイクルに従事する個々の業者が「プロ」として、専門知識、情報の習得やリサイクル事業への情熱をどれほどもっているかが重要なことは言うまでもない。例えば、新素材のPETボトルの回収についても、専門的なアドバイスがどれだけできるかである。

新しい環境変化に対応するには、従来の「業種」を超えて、「業態」への変革として、リサイクル事業のあり方が問われているのである。

「業種」から「業態」への変革というのは、かって流通業界で実施されてきたもので

ある。例えば、「八百屋」「魚屋」「肉屋」「酒屋」という取扱商品での専門化では、事業の拡大や消費者のニーズに応えることができなくなり、「スーパー」や「コンビニエンスストア」という消費者の生活スタイルにあった形態に営業を変えていった。同様に、「鉄屑屋」「ぼろ屋」「古紙屋」…という業種から、業態としてのリサイクル事業に転換していかねばならない。

（2）創造的リサイクルとネットワーク

業界全体として、個別企業の枠を超えて、「地域に貢献するリサイクル事業」はどうあるべきかが重要である。

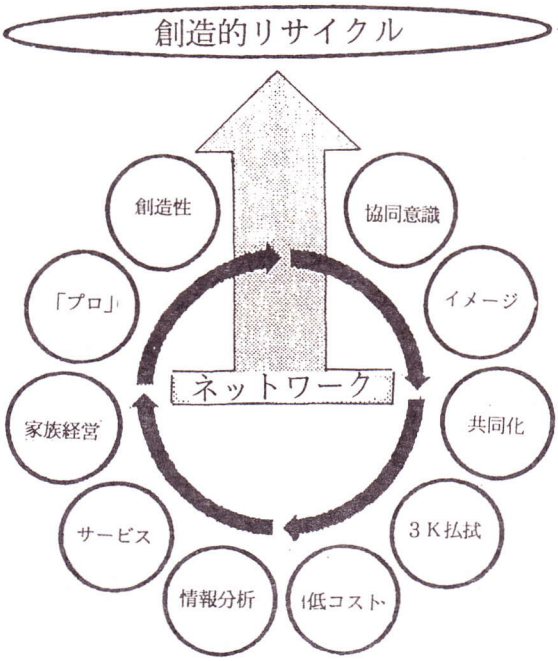
そのために「創造的リサイクル」と「ネットワークの構築」をとりあげる。当業界にもしっかりしたネットワークが必要である。集団回収や分別収集をすすめていくうえにおいて、「市民との仕事」というのはネットワークなくしてできないのである。

紙、缶、ぼろ、びんと多種多様ものも集め、分別し、販売する仕事は、まさにネットワークづくりである。つまり自分がすべて仕事をするのではなく、仲間を知っていると言うことである。そういうネットワークが無数にあって、しかも固定しておらず、アメーバーのように組み合わせの形態を外的環境変化に対応して変えていくことができることである。

創造的リサイクル事業の新展開としての10項目をあげ、図示しておく。資源回収業が今後とも発展していくためには、若い人達にリサイクルの魅力をどう伝えて行くかである。それはネットワークづくりであるし、創造的リサイクル事業である。

では創造的リサイクルづくりはどのようにして始めればよいのかが大きな課題である。

それは、「自ら資源回収業とはなにか」「地域のサービスとはどうすることか」「現在の集団回収システムはこれでよいのか」「自治会、子供会、婦人会などとの交流は古紙の回収だけでよいのか」「集荷だけでその他の付加価値を高める方法はないのか」「再生資源業界の構造はこれでよいのか」「市況に翻弄されてよいのか」など業界構造のあり方を見直すことである。



組合員 新年の一言

理事長　紺野武郎
第一にリサイクルの正しいルール作りに戦う年としたい。第二に毎月一日でいいから休みたい。

副理事長　藤本俊光
今日より若い日はないのだから本日ただ今を最高にがんばって参ります。

副理事長　奥山賢児
昨年は開業以来最悪の年でした。今年は、人生で最高の年にしてみせます。

副理事長　藤野昭吾
本年は昨年にもまして組合の仕事に精をだしてますます組合が発展するようがんばってまいります。

監　事　石川　厚
私は昨年の大病が漸次回復しつつあり、皆様にご迷惑をかけて申し訳ありませんでした。市況は永い深刻の時、皆様の努力をお願いすると共に私も今年は脱落の域を抜け出すべく医事に専念するつもりです。再資協に益々栄光あれ。

専務理事　萩原貞雄
今年こそ古紙の使用拡大のため古紙の新しい使い道の研究を成功させたい。

理　事　土井益次郎
委託事業の拡大を目指して組合の発展に尽くしたい。

理　事　川島正雄
神と国とに誠をつくし掟を守ります。いつも他の人々を助けます。体を強くし、心をすこやかに、徳を養います。

理　事　古山　忠
今年も無理せず、気を若く持って仕事にがんばります。

理　事　古川敏雄
昨年は東久留米の回収に参加させて頂き有り難うございました。今年も組合のために頑張ります。

理　事　斉田康好
組合事業拡大のため力をつくしてまいります。

理　事　小畑和夫
寅年は私の年です。組合の仕事も自分の仕事も一生懸命がんばってまいります。

理　事　吉浦高志
昨年はリサイクル産業がいかに地球環境にとって必要な存在か勉強いたしました。今まで以上に仕事に誇りをもって地域に貢献していきます。

青年部　土井健一郎
来る年も来る年も同じ決意。今年は家が建てられるくらい儲けてみせます。

監　事　田中　彰
今年こそ酒をひかえ、仕事もひかえ、リサイクルの田中と呼ばれるように組合活動に命を燃やします。

広報委員　石川義雄
寅年の今年こそ、嫁さんをもらうぞ?少なくとも二人は。子供は五人欲しい今年中！

広報委員　奥山慎吾
昨日もまじめ今日もまじめ明日はどうなるだろう。やっぱりまじめに生きよう。

相談役　吉浦力夫
この道何十年の私ですが昨年ほど悪い年はありませんでした。谷深ければ、山高し、21世紀に大きく羽ばたくように頑張っていきます。

さらに急降下古紙価格の最安値

9ヶ月で昨年を超える回収量

昨年度1年間の取扱量

	小平	柳泉園	東村山
新　聞	1,149,460	1,070,440	559,360
雑　誌	2,863,700	3,033,410	778,370
段ボール	1,420,250	1,292,800	305,380
合計	5,433,410	5,396,650	1,643,110

今年度9ヶ月間の取扱量

新　聞	941,820	1,092,090	495,450
雑　誌	2,335,270	3,176,340	758,870
段ボール	1,045,660	1,242,780	248,210
合計	4,322,750	5,511,250	1,502,530

左の表は昨年度1年間と今年度4～11月までの9ヶ月間の当組合の古紙取扱量である。

柳泉園は、すでに昨年1年間を上回っており、他の2市も来年3月までには昨年を上回る事は確実である。

古紙価格の暴落による民間回収の衰退が行政回収に集中している事を如実に示している。

特に、回収したらマイナスになる雑誌はますます増える傾向にあり、新聞、段ボールも予断を許さない。製紙メーカーは紙の選分を今まで以上に厳しく要求してきており、古紙リサイクルに手間と費用がさらにかさみ民間回収の衰退に拍車をかける状況になってきている。

古紙における価格暴落、費用の高騰は、今後、ごみ減量、リサイクルの加速のなかで常に浮上してくる問題となるだろう。

純パルプトイレットペーパーの生産急増中！

大手製紙メーカーによる純パルプ物トイレット紙生産の設備増設が目に余る。

昨年十一月の出荷状況だけを見ても、大手六社の純パルプ物の伸びが前年比七・六％にもなっている。対して中小メーカーの古紙物は〇・五％の伸びにとどまった。九七年の古紙物トイレット紙のシェアがまた一段と狭まると言う。

製紙連合会の主張によると、『リサイクル五六計画』は、古紙価格をさらに下げ、再生紙に対する消費者の意識改革をしなければ達成できないとして、暮から年始にかけてまた段ボールや新聞の値を下げてきた。しかしその裏で、大手メーカーが純パルプの使用量を急増させているとは、何と言う暴挙なんだろう。

消費者は純パルプ物か古紙物かの区別がつかないままトイレットペーパーを買うことが多いと言う。再生紙が一目で解るように包装を色分けしようとの提言もある。日本のトイレットペーパーは品質が良いだけでなく世界中で一番価格が安い（ドイツの約三分の一）そして一人当りの使用量は世界一多い。（ドイツの約二倍）という。こんな事をしていていいのだろうか。とにかく皆でもっと怒ろうよ！

古本屋とリサイクル

㈲みちくさ書房　早川伴司

私の本好きは、いよいよ高じて十数年のサラリーマン生活に別れを告げ、小平市の場末に小さな古本屋を開業してから、かれこれ足掛け二十年となりました。

開業当初は手持ちの本を売り食いするような形で開店し、その後はお客様が売りに来る店買いの本を中心に遣り繰りすれば、なんとかなるさと楽天的に考えておりました。

ところが、この商売はそんな甘いものではありませんでした。当時の私は古書の目利きも確かなものでなく、値段付けも甘く、直ぐに良書本だけ売れて店に残ったものは駄本ばかり、という苦い経験をしました。つまらぬ本だけでは、お客様もだんだんと減ってこの商売は成り立たず、お客様の持ち込む店買いの本を待っているだけでは、供給が追いつかない状況がしばらく続きました。このままでは店を閉めなければならない。しかも、四人家族を養って行くためにも、飯の種である本を沢山仕入れて上手に販売し、売上げ拡大をしなければ、と頭の中では単純明快に理解していても、実業の世界では、さてどうしたものかと思案する毎日でした。

当時、昭和三十年代、四十年代の高度成長を経て古くなった家の立て替えが増加し、世代も変わり古い本の処分が多く、ちり紙交換業者が全盛の時代にありました。小平市の場末の当店にも何人かのちり紙交換業者の方が、本を持ち込んで来てくれて、仕入れの面では大変助かっておりました。しかし、この本を高く買えば商売にならず、安く買えば直ぐに本の持ち込みは無くなる。売れない本は買いたくない。さて、困ったなと考えておりましたところ、ある交換業者の方が、うちの建場に来てみたらどうか、古本屋が何件か出入りしているよ、と言う情報を得て、私は建場の仕組みも知らないまま、出向く事に致しました。

翌日、その建場に行って回収された本を仕入れたい旨、申し出ましたが、同業の古本屋業界にも縄張りがあって、他店の出入りしている建場には行ってはならないとの暗黙の了解がありました。従って、建場の方も私の申し出を快く「はい、いいですよ」と言う訳にはまいりません。当時の私は古書組合にも加盟しておりませんし、サラリーマンの経験しか無い自分には、商売人のしきたりや、商売の原理原則も深く考えず安く買って高く売る。単なる儲け主義優先の考えがこの商売だと思っておりました。商売とは「人との和や、繋がり、ご縁」がもっとも大切なものと言うことを身に沁みて勉強させて頂きました。この時の私は、良い返事をもらわないまま、とにかく建場に通わせて頂き、しばらく経って、その人間関係の醸成からか、やっとの事でご了解を頂いたのが三栄サービスの紺野社長の会社でした。最初は雑誌だけでやってみるか、と言われ、目頭が熱くなった事を今でも昨日のように憶えております。その後、三栄にお世話になってさらに人の和を広げさせて頂き、出入りの同業古本屋にも紹介を受けて、東京古書組合にも加盟いたしました。このご縁が無ければ今の自分は無い訳です。お陰様で店も順調に推移し、現在では国立の駅前で古本屋の営業を継続しておりま

す。

このつたない二十年を振り返ってみますと、古本屋建て場、ちり紙交換との関係は、本の仕入れ販売上の単なる利害上の関係だけでなく、このリサイクルによって、古い昔の本の大部分が、救われ、また欲しいお客様の手に渡り更に生かされました。従って、その貢献度の計り知れないものが在る事は業者の私が十分認識しております。しかし、ちり紙交換で建場に集荷された本の大半は、もったいない事に製紙工場の藻屑と消えました。この消えた本を今思うと、何とか生かせる手だてはなかったものか。と心残りの毎日です。　現在では建場もオートメーション化され原紙の価格破壊の影響から回収のコストアップをもろに受け、ちり紙交換業者も成り立たなくなって、廃業する業者の方もいて、めっきりと減ってしまいました。昔をしのびますと、パレットに野積みされた山に登り、宝となる生本を探す事も懐かしい思い出となりました。

これからも業界の皆様と一致協力し、文化遺産ともいえる貴重な書物のリサイクルを通じて新しい時代に合った発掘を模索し、すすめて行かなければいけないと使命感に燃えておる所存です。

エコネット多摩開催　多摩R団連（一八協組）も参加

多摩地区の全市町村による初めての統一リサイクルイベント「エコネット多摩」が11月15日（土）立川市で開かれ、家族連など約一万人が訪れた。

多摩地区の三一市町村の首長で構成する「ごみ減量・リサイクル推進会議」が二一世紀のリサイクル社会を目指して開いた。同会議は平成七年十月に発足。今回の催しには、各市町村の環境、ごみ担当課の職員も運営に携わっている。

参加者は、持参した牛乳パックを会場入口で再生紙トイレットペーパーなどのリサイクル製品と引換え、PRコーナーでは、捨てられてもまだ使えるアンティークカメラなどが並んだ「ごみの中からこんなもの」展を開催。空缶で作ったみこしや各自治体で作られている再生紙のトイレットペーパーなども展示された。

多摩R団連に加盟している一八団体もブースを設けて、古紙・鉄非鉄・金属・ビン・カレット・古繊維各業界からの展示品とオリジナルな再生紙のティシュペーパー、ノートなどを配り約二千人の多摩市民にPRした。

東多摩再資協からは理事長と藤野副理事長が参加した。

同推進室は「処理場の問題は各自治体が単独で取り組むには限界がある。多摩が一つになって二一世紀のリサイクル社会の扉を開きたい」と話していた。

私の履歴書　①

日興紙業商事株式会社

代表取締役　渡邊一史

大学を出て五年間、教師をした。

その後、シナリオの世界で仕事をしていた頃の昭和三六年、新宿で原料問屋を営んでいた義父が急逝。

当時店には二百人前後の大勢の人が寮にいた。家族持ちの人も含めると、総勢四～五百人の大世帯であった。ちょっとした田舎の「字」ぐらいの人数である。

義父は、戦後の焼け跡（七百坪位の土地）にバラックの家を建て、焼け野原でどのように生きてゆけばよいかと、途方に暮れている人達を住まわせ、自分で立ち上がることを奨めた。キップがよく、物事にこだわらない心の大きな人柄に、慕う人も多かった。明日への希望を人々に抱かせたことに、東京都知事、東龍太郎氏自らが感謝状をもって自宅を訪れ、直接手渡されたことが昨日今日のように思われる。

義父の死によりその遺志を継ぐものがいないため、シナリオ執筆の傍らやり始めたものの、二股かけてやれるほど甘く楽ではないことを思い知った。一口に原料問屋と云っても、故紙、スクラップ、非鉄（金、銀、錫、銅、ニッケル）その他種類も多く、見分け、選別、梱包、搬入をおろそかにすると、たちまち在庫の山になってしまう。その日のうちに片づけてしまわなければならない大変な仕事で、店の番頭さんも三～四十人はいたが、皆関心する程よく働いた。

店も永い間の過去の実績と信頼により、色々な仕事が次々と入ってきた。毎日が戦争だった。各電線メーカーからの銅線の引取り、東京都水道局の入札、各々の下見、検分、見積もり、段取り等、時には睡眠時間さえもとれない程の大忙しさだった。

戦後一時、国会図書館になっていた建物の解体スクラップを東芝製鋼や久保田鉄工等の製鉄メーカーに搬入したこと（そこは現在、四ッ谷駅近くの元赤坂の迎賓館に生まれ変わっている）。又旧新宿ステーションビルの解体スクラップも手掛けていた関係で、後々東村山に転出後も現在の新宿マイシティの仕事も引き受けたことなど、きつい仕事の中にもやり遂げたことの楽しみがあった。

＊次回は紙原料にこだわりたいと思います。

夢見鳥

（石川）

リヤカーを引っぱって資源物を集める時代からチリ紙交換、建場の時代そして市が集める時代へ！何を集めても苦しい世の中に今います。古紙、鉄、その他低価格これからどうなるの！有価物、無償、それともゴミになるの！私はリサイクルの仕事に携わっていて、上手にリサイクル出来ているか疑問に思う時があります。時々なんとも言えない色ビンの夢を見ます。捨てビン、リサイクルビン？もっともっとリサイクルに興味をもたねばいけない思います。新年にあたり、心新たに頑張ります。

川柳

リサイクル
やってるあなたは
美サイクル

株券が
資源ゴミとなる
百年目

雑誌古紙
お金をつけて
頭下げ

（剽才）

「一升びん」よおまえもか
三五〇万本の過剰在庫で生きられない

一升びんの生きびんとしてのリサイクルが崩壊寸前にまで追い込まれている。

昨年、古紙の暴落と余剰が社会問題となり、マスコミにも大きく取り上げられた事は周知の事実である。その解決策に行政を始め、関係団体等が知恵をしぼっている。

ほとんど知られてはいないが、一升びんも余剰と暴落の直撃を受け生きびんとして生きられない局面に落ち入っている。一升びんの関東地区の在庫は七五〇万本で正常在庫といわれる四〇〇万本を大きく上回り、貯留場所の確保、維持も限界に近付いている。

又、一升びんを入れて運搬する箱（Pばこ、と言う）は六本入りで、メーカーが限られているため、箱を調達する経費がかさみすぎる。どんな箱でも良いわけでなく、一升びん専用のPばこでなければ流通できないという事情がある。関東以北では特にこのPばこ不足が著しい。

新びんの生産は大体横ばいだといわれていることから、回収された一升びんの再使用度が減少しており、ますます在庫が増える結果となっている。

一升びんの今後の需要は減退の一途をたどる可能性は非常に強い。紙容器やペットボトルに急速にとって変わられつつある。

そのまま洗浄し「再使用」できる「生きびん」を死滅に追いやり、原料として「再利用」するPET容器に全面的に席を譲れば済む事なのか。リサイクルとは？原点を見つめなおさねばならない。

行事・行動

（十一月）
七日：小平ごみ減量審
十一日：定例理事会
十三日：早稲田大学・廃棄物に関する研究会
十五日：多摩リサイクル祭り
十八日：集団回収委員会
二一日：柳泉園RC安全委
二六日：古紙C・業務委員会

（十二月）
二日：組合健康診断
三日：全原連・古紙余剰問題シンポジュウム
十日：財務委員会
十一日：定例理事会
十三日：古紙循環プロジェク：組合忘年会
十七日：広報委員会
十八日：委託事業委員会
二〇日：小平市RC責任者会
二二日：広報委員会
二六日：小平市RC仕事納め
二九日：柳泉園RC仕事納め

編集後記

明けましておめでとうございます。本年も昨年にましてご愛読くださいますよう、お願い致します。

直言拝聴にご寄稿下さいました吉村先生たいへんありがとうございました。有史以来最悪の状態にある私ども再生資源業界にとって、とても具体的な提言、目から鱗がおちたような思いです。

今年は寅年です、厳しい状況がこのさき続いても、勇猛果敢につき進み、多摩のリサイクルは東多摩再資協でなければ進まないと言われるように頑張って参りましょう。

ヴィーナス通信読者の皆様、御意見、御感想などございましたら、ドシドシ、事務局までご連絡下さい。（吉浦）